

読売俳壇

高野ムツ才選

爽竹桃の頃と広島からの文
東京都 吉村 恵子
【評】広島の人からではなく、広島自体からの手紙。爽竹桃は原爆投下で絶望に喘ぐ人々にかすかな生きる望みを与えてくれた花。今年も広島から世界各地へ手紙がやってくる。爽竹桃潮入川に小さき渦

【評】どこにもある港町の夏の暮れを思い浮かべても夕汐に生まれた渦が印象鮮明。爽竹桃から広島県の元安川を連想すれば、なお暗示的。四十度知ってあの世のお土産に

【評】今年から四十度以上を酷暑日と呼ぶことに。作者の名古屋は昨年八月、四十度の日があった。異常気温が黄泉の土産とはイロニー横溢。蟬時雨はいつくまに無言館

花火般波に引かれて戻されて
大阪府 今井 文雄
水切りし供華を墓前に雲の峰
川越市 大野有之介
胸長にまたも風入れ真菰刈

三伏の喉に転がすうがひ水
津市 中山 道春
炎天のホイッスル砂巻上げて
松山市 夕月 秋人
横須賀市 丸本 晴美
炎天下絡み合ふ憂解さばす
西宮市 塩川 直樹

小池 光選

猛暑日にわれは思へり南極点にいちばんのりせ
しロアルド・アムンゼン 名古屋 山守 美紀
【評】ノルウェーの探検家アムンゼンが人類最初に南極点に立ったのは1911年。この猛暑の中で、極寒の南極を思う発想が自在でよい。こういう暑さの凄さ方もある。その先の甘い何かに向かうのは熊野古道の蟻の行列
守口市 小杉なごん
【評】蟻はどこにでもいるから、熊野古道にいても何の不思議もない。けれど人は、そんなところの蟻をまじり想像しない。そこが面白い。世界遺産の蟻の行列、どこへ行く。

正木ゆう子選

手花火のなごりの無言だれか解く
神奈川県 石原美枝子
【評】線香花火など特に、終の火花が消え、闇となった束の間、皆の黙する時がある。数秒後には誰からとなく立ち上がり、日常に戻るのだが、繊細な事柄を、確かに言い留めた。牛井に添えて涼しき紅生薑

【評】牛井十紅生薑に季節感があるとは思えないのに、妙に説得力のある涼しさではないか。生薑の辛みとともに、紅がぴりりと効いている。甚兵衛の電波の届かないあなた

【評】甚兵衛のあなたは何処に居るのか、電波とは何の電波か。意味の取り難い句。しかし「届かない」ということだけは確かに感じられる。オバQもふわふわり橋涼み

草津市 中村 俊彦
蟬生る土の匂いを陽に洗ひ
生駒市 高橋 裕樹
富士登山ごこねすぎに五十年
東佐野市 布野 寿
甚兵衛に着替えた途端栃木弁
佐野市 村野 則高
この夏もただ憧れるだけギリシャ
姫路市 志 築

湯の匂ひ部屋に振りまく裸の子
神戸市 西 和代
犬吠や空も全円梅雨晴間
神栖市 桐本 博昭

栗木 京子選

天花粉・蚊取り線香・涼み台 行儀良かったあの頃の夏
奈良県 田中小太郎
【評】酷暑日などなかった頃の夏。クーラーに頼らなくても暑さをしのぐことができた。上旬の品々や場所にはどこか情趣が漂う。行儀良かった「が言い得ている。世話人の観覧席へ会釈して山鉾の列しづつと過ぐ
【評】七月に京都で開催される祇園祭。ハイライトの山鉾巡行が無事に行われた。祭りが継続するのは世話人の方々の尽力があった。こ。『会釈して』に重みを感じられる。

小澤 實選

着陸にバウンド三度地は炎暑
倉敷市 谷吉 修一
【評】旅客機が着陸した瞬間、車輪が三度もバウンドしたという。主体はこの旅客機に搭乗して、着陸の衝撃を味わっているか。炎暑は窓の外の強い陽光で判断していい。吸ひ物の蓋の手強き鰻かな

【評】鰻重の蓋はたやすく開いたが、きも吸ひのお椀の蓋がなかなか開かない。それもまた、鰻を食べるあじわい。店の人を呼ぼう。ミニトマト虫喰ひもまた罫割れも

【評】ミニトマトを育て上げたが、中には虫に食われたものもあるし、ひび割れてしまったものもある。それらにも愛着があるのだ。ライトからレフトへの風雲の峰

東京都 伊藤 直司
覆ひたる蟻しか見えねども蚯蚓
会津若松市 安藤 和繁
熱帯魚の水槽だけが光る部屋
町田市 花田 港
楊梅のしきりに落ちて地の染みと
東村山市 小原 寿房

水割りの崩る音や夜の秋
東京都 小出 功
マンゴーの種のまはり妻のもの
三郷市 山田 吾男
給食の白きエプロン雲の峰
横浜市 塚本 文武

俵 万智選

画用紙をくるりと巻いて覗く子の船にのりたり
八雲は海
川崎市 三浦 直子
【評】上の句の動作は、望遠鏡を覗く冒険家か、はたまた海賊か。子どもの想像力にのって船に乗り込めば、豊かな世界が広がる。四句切れ、体言止めのリズムがびしりと決まって、夏の絵画が完成した。銀髪の子がほほえむマンシヨンのチラシの空はいつも青空
大和郡山市 四方 護
【評】夫婦の老後を、理想的な感じで描いたチラシなのだろう。「いつも青空」と言い切った後に広がる現実の曇天が、一首の肝だ。

津川絵理子選

五十九の父すててを穿いて逝く
さいたま市 関根 道豊
【評】まだ若かった父は夏に亡くなったのだ。思い出しても辛いことだが、「すててを穿いて」がどこかなくユーモラスである。父らしいことだと作者の心に残ったのだろう。住人の顔して歩く避暑地かな

【評】避暑に訪れるだけなのに、数日過ぎううちにその土地に馴染んでしまふ。「住人の顔して」が面白い。意外な避暑の読み方である。トマト齧る辛口読書感想文

【評】読書感想文という、あまり否定的なことを書かないような気がする。「辛口」が効いている。トマトを齧りながら読んでいたのか。ドロリンの浮いて指示待つ青田かな

千葉県 渡部 健
雲の峰ついに力を抜きて立つ
東京都 望月 清彦
悪友も逃げれば親友アロハシャツ
神戸市 田上 勝清
人ごも日照雨に消えて縁涼み
志木市 谷村 康志

朝顔を蒔きしがゆかにプロク立つ
宇都宮市 松広 訓
七夕の笹にピンクの紙の蛸
熊本市 貴田 雄介
暑気払い京都北山雲ケ畑
四街道市 井戸川 浩

黒瀬 珂瀾選

此方わからず子の手をつなぐ社の雨に腕を濡らして
高松市 長船給里子
【評】親は子への向き合い方に悩む。でも、互いに手をつなぐことで交わす愛情は本物。この濡れた腕が親子の信頼の象徴です。賢き機能持てたしと思ひおるや我が家のエアコン無骨な風なり
草加市 新井美智子
【評】最近のエアコンは高性能多機能で使いこなせる自信がない。長年愛用しているうちのエアコンで私は満足。でも、当のエアコンにしたら、最新鋭への憧れもあるのかも。

枝しおり折

水島和夫歌集『田端日記抄』
著者の第4歌集にして、病ゆえに早世した我が子への鎮魂歌。いとおい日々が確かな手触りで刻まれた。△子とともに年経るほどに増しゆくはなんぞこの子のこころいとし△
(六花書林、2420円)
木下龍也『夜をゆく舟が他にもあることを教えるために歌はひかた』
同テーマで読者と著者が作歌する、文芸誌「群像」の短歌投稿欄をまとめた一冊。歌人、穂村弘氏との対談も巻末に収録。
(講談社、1980円)

【第2回短歌研究評論賞】松沢もる「連作の領分」
【第27回現代俳句協会年度作品賞】庄子紅子「仕草」(30句)
【第7回BR賞】小川未夜子「Be clear」(小島なお歌集「羽降る」書評)、牛尾今日子「壊れていく世界で」(瀬口真司歌集「BEAM」書評)



題字デザイン・イラスト 福田美蘭

(ふりがな)、電話番号を明記。◇他の媒体、選者103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌(俳)◇毎週月曜日に掲載 右の影絵はよしず

くすみ・毛穴・古い

お茶エキスを配合した

今なぜ

83歳の母も

真つ白な泡で

くすみ・毛穴の

あきらめてい

豊富なカテキ

無農薬有機

鹿児島茶匠熊田氏

カテキン濃度10

メイクも落

乾燥小ジワも

年齢肌に潤

洗顔を

蓄積された汚れをス

喜ばれて累計販売数

洗顔後は素肌がパ

70代を過ぎて「ゆうか石

これからはずっと続

洗顔後はピツクリー自

肌を褒められることが増え